
魔女は不幸の始まり

yozakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女は不幸の始まり

【Nコード】

N5286T

【作者名】

yozakura

【あらすじ】

グルグル眼鏡の一太郎君は、家事に追われて勉強もままならない、実は美少年の中学生。ある日、九州弁の変な白と黒のネコに追いかけられますが、その白いネコは魔女だったのです。

1、ネコは不幸の始まり

トットトットト、トットトットト

真っ白と真っ黒のネコが、並んで道を歩いている。

余程の距離を歩いたのか、どちらも汚れてやや疲れた様子。

ネコらしくない溜息について黒いネコが立ち止まり、空を仰いでストンと座った。

「腹減ったばい」

ウルウルと目を潤ませて、なにげに言葉を九州弁でつぶやく。

白いネコが胡散臭い目で振り返り、やっぱり九州弁で言い返した。

「なんばしよっと、早う行くよ」

「どこに？どこに行くつもりね？」

「うるさかねえ、下僕の分際で。ああ、どうでもよかばってん、この言葉はどうかせんと、自分で何言いよるか時々わからん」

「言霊を手に入れるのに、顔で選ぶからさ」

「うぬー」

キョロキョロ見回す白ネコが、通りかかる男の顔をじっと見る。

中年のおじさんは、ネコを見ても関心がないようでお互い顔を背けた。

「チッ、よか男はおらんねえ…」

溜息をついて顔を上げると、道の先から中学生が2人歩いてくる。学生服姿の分厚いグルグル眼鏡にボサボサ頭の少年は、なにやら歩

きながら読書にいそしんでいるが、それは参考書ではなく何故か料理本。隣のセーラー服少女は一人でキャアキャア騒ぎ立て、懸命に話しかけるが無視されている。

とまあ、変な取り合わせだ。

ネコ2匹はピョンとゴミ箱の上に昇り、何となく小うるさいガキが通り過ぎるのを待った。

「ねえねえ一太ったら聞いている？それでさあ」

クラスメートの理子が、しつこくくつついてくる。前を行く一太は、本にかじりつくように足を速めた。

「聞いているから、静かにしてよ」

「もう！ちゃんと聞いてよ。ねえ今日、一太ンちに行っている？」

一太のママったら、日本人形みたいで綺麗よねえ。

ホワンとしてさ、まるでお姫様みたいじゃない？」

みたいじゃなくて、旧家のお姫様だ。

無口な父親とは、どういう訳か駆け落ちしたらしい。

それから生まれる息子の苦労も知らず。

「フンッ！」と不機嫌な顔で料理雑誌のページを目印に折り、パタンと閉じた。

「ねえ！」っと、理子が前に出る。

ビュウウウウ……

いきなりそこに突風が吹いて、ブワツと理子のスカートが舞い上がる。

白いパンツが眩しい。

「やあだあ、一太にパンツ見られちゃったわ」

クネクネいやんと理子がウインク。

しかし一太は眼鏡を取り、目をゴシゴシ擦った。

「ああ、ゴミ入って何も見えなかった」

「もうっ」

怒って先に行く理子だが、白いパンツは母親のパンツを洗濯するの
で見慣れている。まあ、それより理子のお尻は可愛くはあるが。

…俺って、冷めてるなあ。

フツと一息吐いて、一太が顔を上げる。

切れ長の目に、スツと通った鼻梁と細く整った眉。

そのグルグル眼鏡を取った顔は、母親譲りの超美少年。

「こればいっ!!」

「は?」「何か言った?」

いきなり近くから、女の声が聞こえて2人が見回す。

しかし横には、何やら興奮した白いネコと寝そべる黒ネコ。

しかも歩き始めた2人に、ずっと2匹は付いてくる。

「一太、このネコ飼ってるの?」

「まさか、俺は親だけで精一杯だよ」

振り返ると、ニャンと可愛い声でご機嫌取り。

「冗談じゃない。逃げろ！」

2人はいきなり走り出して、一太の家に飛び込んだ。

バタバタと、玄関先になだれ込む。すると奥からやんわりと一太のママが出てきた。

「あら、一太ちゃんのガールフレンド？」

まあまあ、いらっしやいませ、お初にお目にかかります。一太郎のママでございます」

長い黒髪を綺麗に切りそろえ、着物姿に白い肌の日本人形のようなママが、スツと座って三つ指をつき、理子にお辞儀する。

「あ、はあ、どうも、お初でございます。理科の理と子供と書いて理子でございます」

「んま、変わったお名前ですこと、ほほほ」

のんびりママは、時間の流れがどうもゆったりしている。

一太は鞆を置いて靴を脱ぐと、ドスドスと二階へ上がりはじめた。

「ママ、買い物済んだの？」

「あら、ママ、ちゃんと言ってきたわよ。でもね、また冷凍食品が溶けちゃった」

「あー、だから冷凍は買わなくていいって言ったのに…もういいよ」

ガックリしながら自分の部屋に上がる一太を、理子がそうっと追いかける。

二階はどうやら二部屋、古い普通の家だ。

以前聞いたけど、ここはパパの会社の社宅らしい。

ふすまをスリリと開けると、一太がぬぎぬぎして着替えている。ジ
イツと隙間から覗いていると、なかなかスリムで足も長い。

「フッ、一太は私がいただきよ」

グッと理子が親指を立てて、何やら気配に下を見る。するといつの
間に入ってきたのか、さっきの白猫も一緒に覗き込んでいた。

「あんた！一体どこから来たの？」

白猫は、何故か肩を揺らしている。

「うふふふ、私の目に狂いはなかばい」

え？うふふって、このネコが喋った？

呆然と見つめる理子の前を、トットトットと白ネコが部屋に入って
行く。

「わあっ！お前付いてきたのかよ。あつ、理子、何で勝手に上がつ
て…わあっ！」

ワアツと一太が驚くのも無理はない。

何と白いネコはスツと二本足で立ち上がり、ムクムクと大きくなっ
て行く。

「ば、ば、ば、化けネコッ」

「ホホホホ、つかまえたばい」

ネコは人の大きさまでなると、いきなりニュウツと美しい女の姿に
変わった。

2、迷惑な魔女

ネコから変わったその女は、長い白髪を後ろで結い上げ、沢山さしたかんざしのうち鈴の付いたかんざしが音を立てて揺れる。

金の瞳を嬉しそうにほくそ笑み、顔は西洋人のそれで彫りが深く美しい。

派手な装飾をジャラジャラと、胸元の大きく開いた真っ白のドレスを翻して、顔をいきなり一太に近づける。

そしてガツと一太の頬を挟むと、いきなりぶちゅうつとチュウをした。

「あーっ！っ！！」

と、奇声を上げたのは理子だ。

「一太のファーストキスがああ…」

やっぱりさっさとやっておくんだったと、理子が悔しそうにキーツと拳を握りしめる。

ぷはーっと、顔を上げた白髪の美女は、満足そうに一太をポンと突き放し立ち上がった。

「ホーホッホッホッホ、これようやくこの地に合った言霊を手に入れたぞ。

ドミノ！ドミノはどこじゃ」

のっそりと、黒ネコが姿を現す。

そしてフンツと顔を背け、尻餅付いたまま呆然と気が抜けている一太の横で、ベロベロと毛繕いをはじめた。

「おいらは、このままでよかもんね。気に入っとるたい」
「うぬっ、この私の下僕がそのようなことでどうするか」
「下僕じゃなかつ、おいらはパートナーたい」

むむむっと睨み合いをする一人と一匹に、一太がようやく気を取り戻した。

「あんた、だれ？」

「ふっ、人間などに聞かせるのはもったいないが、いた仕方ない。その汚れて錆びた耳で良く聞くんがよい、私の名はエリミネートリアグランチェスカ・マヌーケ。
ほっほっほ！その腐りかけた頭では覚え切れぬであろう。お前達には特別に、ご主人様と呼ぶことを許そう」
「・・・・・・はあ？マヌケ？」

一太が首をひねると、横からガバツと理子が噛みついてきた。

「ちょっと年増のおばさん！マヌケか何か知らないけど、勝手に人の家に上がって何よ、いきなりセクハラ？犯罪よ！これは犯罪！」

ん？セクハラは、覗きをしていた理子もじゃないか？

一太郎がはたと考える。

しかし、そこはすでに女の戦場、今度は白い女が逆ギレした。

「キイイー、誰が年増じゃ、国一番の白魔女に対して失礼であろう。おのれー、目に物見せてくれる」

魔女がスツと、一本かんざしを取る。

指で器用にくるりと回すと、そのかんざしはシュツと伸びて杖になった。

シャン、シャンッ

杖の先に付いた鈴を鳴らし、電灯にガンッとぶつけながら天井板をぶち破る。

「あー！ー！！天井が！ここは社宅なのに！」

すると、どこからともなく地響きが響いて家が大きく揺れてきた。

ゴゴゴゴゴ…

キヤアッと、これ幸いに理子が一太に抱きつく。

一太は状況が掴めず、というか、パラパラホコリが落ちてくる天井をどうやって直そうか、これは夢に違いないと呆然としていた。

「光に潜む、破壊の力よ。我が声を聞き、その力を示せ！われこそは白銀の魔女エリ…」

「フギヤア！」

バリッバリッ

「ギヤアッ、私の美しい鼻があっ」

黒ネコに引っかかれて、魔女がウルウルとうずくまる。

「フッ、くだらん事で魔力を使うんじゃないか」

黒ネコはキラーンと光る爪に、フッと息を吹きかけた。

「一太、一太ったら、追い出さなきゃ、早く！」

グラグラと理子が揺らす一太は、茫然自失のまま、現実逃避してまるで夢の中にでもいるようだ。

しかし、パツと部屋に夕日が射し込んだ時、ハッと我に返って時計にかじりついた。

「わああああっ、こんな時間じゃないかつ、早くご飯炊かなきゃパパが帰ってくる！」

あっ洗濯物も入れなきゃ、くそう、アイロンかけようと思ったのに、あっ、お風呂も沸かさなきゃ、ああもう！」

ダアアアッと、女たちには目もくれず一太が部屋を飛び出す。

あとに残った魔女とネコと理子は、啞然と取り残されて顔を見合わせた。

「帰んなきゃ。あんた等も帰んなよ」

何となく毒気を抜かれて理子と言う。

「どこに？わしらはここにいます」

しかしネコと魔女は揃ってその場に居座った。

「ここって、それって無理じゃない？あんた達どこから来たわけ？」

「我らは異世界から来た。この世に逃げ出した、黒魔女を追ってきたのだ」

ハア、何だか溜息が出る。

だからと言って、一太の家に転がり込むのはお門違いだ。

「ネコになってさ、野宿すればいいじゃん」

「嫌じゃ、ここがいい。ここが気に入ったのじゃ」

むうう、今度は理子がムツとする。こんな綺麗な年増女、これ以上ここに置いたらキス以上になりかねない。冗談じゃない。

「帰るの、帰れっころ！」

掴みかかる理子に、にゅっと魔女は白ネコに変わり、二匹のネコはダーツと家の奥へ走り去ってゆく。

「ああああ！この卑怯者っ、どうせ一太のパパから追い出されるんだから！」

結局、理子は仕方なく諦めて帰ることにした。

階段を下りて台所を覗くと、一太がダダダッと凄まじい包丁さばきで料理中。

隣の居間ではママが湯呑みを持って、テレビの前にきちんと正座している。

何となく、変な家ねえ。

「お邪魔しましたあ」

理子はまじまじと家を見回し、やがてジャアジャアと肉を炒めるいい香りにお腹がきゅうつと鳴った。

3、カレーな食卓

「で、その黒魔女さんってどこにおいでなの？」

ママがのんびり訪ねると、白魔女エリミネートリア：略してエリがドレス姿で座敷に座って、カレーを食べながらうむと頷く。

「ここに気配はするのだが、ようわからんのじゃ

大罪犯して塔に封じられていたのに、牢番をたぶらかして逃げてしまった

こちらは迷惑千万、とはいえそなたらに出会えて幸運であつた」

「ひどい悪運だよ、貧乏神」

ぼそっと、聞こえるように一太がつぶやく。

エリがサツと目をそらして、ニツコリ感嘆の声を上げた。

「そ、それにしても、この黄色い物は見た目は悪いが美味しいのう。
のうドミノ」

隣でドミノという黒ネコも、べろりと口元を舐めて顔を上げる。

ネコのくせに、人間と一緒にのカレーを食べていた。

「美味かあ、こげん美味かと初めて食ったたい」

「まあ、遠慮なく食べてね。ねえパパ」

ママの隣でパパは、いつものようにフツと微笑みながら無言でビールを飲んでいる。

パパはまだ若いのに白髪交じりの髪で、それをオールバックに撫で

つけて見た目も格好いい紳士だ。

エリも一目で気に入って、隣りに吸い付いていた。

「うむ」

ちらっと、パパが食器棚に視線を走らせる。

「あら、一太ちゃん、パパがコップ取ってって」

「あー、はいはい」

一太がコップを取りパパに渡す。

するとパパは、それをエリに渡してトクトクとビールを注いだ。

「これは何じゃ？煎じ薬か？」

「ビールだよ、お酒」

無言のパパに代わって一太が答える。

「ふむ」エリが恐る恐る口を付け、気に入ったのかクイツと空けた。

「おお！なんと美味しい煎じ薬じゃ」

「おいらもおいらも！」

ドミノが横でピョンピョン跳ねる。

皿を持ってきてそれに注ぐと、ネコまで酒盛りをはじめた。

「こりゃ美味かあー」

「いいけどさ、一体いつまで居座る気？うちも貧乏なんだけど」

空の炊飯器を見て、一太が冷たい目でエリ達を見る。
するとママが、急にウルウルと一太にすがりついた。

「まあ、うちはそんなに貧乏だったの？まあ、ママは何も知らないのね」

「う……いや、そんな極貧じゃないんだけど。2人はヤバイかなあ
って」

「でもドミノちゃんはネコですもの、大丈夫よ。ね？」

ママのウルウルには、一太も弱い。

「そ、そう、だね」

頬を引きつらせながら、仕方なく頷いた。

「キャアツ！じゃあ家族が増えたお祝いよ」

ママがはしゃいでまたエリにビールを注ぐ。

「うむ、よろしく頼むぞ、ママさんにパパさん」

「よろしくばい！」

「うむ」とパパも頷く。

「くそー、なんだかなー」

何だか偉そうなエリにむかつきながら、一太はパパの視線を受けて、
台所へビールのつまみを作りに行った。

4、ボンデージの魔女

「ううー、眠いー」

一太が目をしむしむと、擦りながら学校へ急ぐ。

昨夜は遅くまでアイロンを掛け、おかげで宿題が夜中までかかった。その上今朝はきちんと起きて、みんなの分のお弁当に朝ご飯を作り、食器を洗って洗濯物を干してと、信じられないほど忙しい。

おかげで毎日授業中はゆっくり寝るので、すっきりするけど勉強どころじゃない。

このままじゃ全寮制の進学高校、松蔵学園は更に遠い。

早くあの家から逃げ出したいのに、最近は赤点ばかりだ。

「一太ーっ、一緒にいこー」

タタツと理子が駆け寄ってくる。

彼女はいつも女友達と登校するのだが、最近はその友達が朝練で先に行ってしまうのだ。

「おはよっ」

バーンと背中を叩かれて、ヨロヨロと一太が足を取られる。

「痛いじゃないか。止めてくれ、目が覚める」

「なんで？」

「一時間目に集中して寝るんだ。そしたらあとは勉強できる」

「集中してって、ずっと寝てるジャン」

「心がまえだよっ」

まったく、一日中嫌な奴につきまとわれる。

俺が一人になれるのは、トイレと風呂だけだ。

何だか悲惨な状況の一太は、早く机に伏せて眠りたい。

急ぐ彼は、半分も目が開いてないグラグラした頭で、いきなり路地の交差点で女性とぶつかった。

「きゃあんっ」「わあっ」

ドスンと尻餅を付いて、一太が相手の女性を確認する。長い黒髪の凄い美人だが、格好が凄まじい。声を掛けるのをすっかり忘れて思わず見とれた。

朝っぱらから、ぴっちりと身体にフィットした派手な真紅のワンピースは超ミニスカート。

しかも一太に向かって編みタイツの足をガバッと開いている。

さすがに眠気も吹っ飛んで、思わずランランと女性の股間に目が釘付けになった。

「いったあい、いゃん」

「あ、あ、す、すいません。あの、俺、ちょっと目が悪いもので」

眼鏡を外して、一太がコシコシとレンズをハンカチで拭く。その一太に美女はパッと顔を上げ、キャアッと奇声を上げた。

「きゃあああんっ、あたしの好みいっ」

「は？あ、あの」

ガバッと黒髪の美女が、一太に抱きついてくる。真っ赤な顔でちょっと嬉しい一太だが、そこに理子が割って入った。

「ちょ、ちょっと離れなさいよオバン！これはあたしの物よ、あたしが先に目え付けたんだからね！」

「何よん、無粋なブスねえ」

「ムカツ、何がブスよ、この可愛い理子様に向かって。大年増の色ババア！」

くそう、悔しーっ！相手は美人のナイスバディだから、年しかけなすところが無い。

「これはねえ、このサキユーラ様が頂きよん」

「何よ渡すものかつ」

グツと後ろから一太を抱いて引っ張る。すると美女は前から抱きついて引っ張り、グイグイと引き合いになった。嬉しいけど、一太はたまらない。

「何だよ、離せよこの2人とも！いててて、俺は誰の物でもないよっ、俺は俺んだあ！」

昨日から、俺は呪われてるのか、それとも単に運が悪いのか。きっと女難の相が出ているに違いない。

「もうっ、乳臭いガキのくせにしつこい女ねん！」

バサツと、いきなり美女の背からコウモリ羽が広がった。

「わああっ、妖怪！」

「んま、失礼だわん。巢に持って帰って、ゆっくり遊びましょ」

「巢？巢って、ワアッ」

バサツバサツバサツ

風を巻き起こし、サキューラと共に一太の身体が浮き上がる。

「この泥棒妖怪！一太を返せえっ」

そこへ理子がぶら下がり、行かせる物かと足を引っ張った。

しかし理子がズボンをグイッと引っ張ると、一太のズボンがずるっと抜ける。

ズボンと一緒にパンツも下がる。

「ギャーエッチ、止めてー誰か助けてー」

虚しい悲鳴が辺りに響く、しかし朝の出勤時の忙しい時間帯、振り向く人はいても助けにくれる気配はなし。

誰もがサキューラの、あまりにも正当派悪魔らしい非常識な姿に、特撮映画か何かの撮影とでも思っているらしい。笑いながら、やたら携帯で写真に収めていく。

ここでズボンと一緒にパンツが脱げて、しかもフルチンで空を飛んだら恥の上塗り、明日から街を歩けない。学校に行けない。

「うん、もう、往生際が悪いわねん」

バサッバサバサッ

サキューラは羽の動きを更に早めて、引っ張る理子の足も浮き上がる。

「あ、あ、キヤアッ、一太あっ」

「ひー、パンツから手を離せえっ」

「聖なる者共！浄化の光で汚れを燃やせ！」

ポオンッ！ゴオオオ！

「きやあああんっ！」

いきなり声と共に、サキューラの身体が燃え上がる。

「ギヤアアッ！火っ、火ーっ」

「あちっあちあち！いてえっ！」

その火に焦がされながら、一太と理子が、ドスンと地に落ちて尻餅を付いた。

バタバタと三人が争っていたそこへ、ようやくエリとドミノが現れる。

ウフフフツと不気味に笑うエリは、何だか目が飛んでいる。ドミノはその横で、フウツと毛を逆立てていた。

「ウフフフフ、見つけたぞ黒魔女サキューラ。国一番の白魔女エリミネートリアグランチェスカ・マヌーケが成敗してくれる」

「やあねえ、マヌケブスに見つかっちゃったん。ん、もう、野暮ったい火ねん」

サキューラは身体を覆い尽くす火を、まるでほこりを払うように払ってしまふ。

次第にカアツとエリの目が、血走っていった。

「おのれ、自分こそ若作りの年増ブスのクセに、国一番の白魔女の力を受けてみよっ」

エリが、スツとかんざしの一本を取ってクルリと指で回す。
するとそれは、ヒュツと伸びて杖に変わり、エリは杖の先に付いた

鈴をしゃんしゃん鳴らして空高く掲げると、電柱にガンとぶつけないがらまたクルリと回した。

「聖なる風よ、大いなる力でこのブス女の身体を千に引き裂けっ」

ビョオオオオオッ！！

いきなりサキューラ目指して風が巻き上がる。

その風はどんどん大きく竜巻のように巻いて、辺りのゴミ箱に家の植木に瓦までがガタガタと舞い上がりはじめた。

「ホホホ！こんなそよ風、涼しいくらいよん」

サキューラも風に巻かれながら笑い声を上げ、爪を鷹のようにシュツと伸ばし、それを地面に突き立てる。するとそこから、地響きを上げて地面がエリに向かって大きく裂けた。

ビシッ！ゴゴゴゴ

「キャアア、一太あっ」「逃げろ、理子っ！」

ビシッシャアアアアッ！

地面からは水道管が割れたのか、大きく水が吹き上がる。

「なんだなんだ、わあっ！」「地震？！」

ワイワイと近所の人まで騒ぎだし、騒然となってきた。

「やめんねエリッ！フギヤア！」

バリッバリバリ！「ぎゃあっ」

ドミノが慌ててエリに飛びかかり、引っ掻いて押し倒す。一太はサキューラに駆け寄って、「やめろっ！」とその頬を思い切り叩いた。

「きゃんっ」

思いがけなくただの人間に、バシッと叩かれてサキューラが頬を押さえてひっくり返る。

すると地響きは収まり、ドミノのおかげで風も止まった。

人々が家を飛び出して空を仰ぎ、興奮して何事かと話している。しかし、それがここにいる女2人の仕業だとは、誰も気が付いていないようだ。

一太が二人の間に立ち、双方に思い切り怒鳴り声を上げる。本当是我们的悪い大人達だと、心底あきれ果てていた。

「人に迷惑かけて、何が魔女だよ馬鹿野郎！そんな力を持ってるんなら、たまには人の為になってみやがれてんだ。顔洗って出直して来いっ」

一太の怒った顔なんて初めて見る。理子はその毅然とした態度に惚れ直しながら、時計を見てワッと飛び上がった。

「一太！遅刻だよ！まずいよ、完璧に遅刻」

「行こう、理子」

ポカンと見つめる魔女2人をあとに、ずり落ちたズボンを上げて学校へ向かう。

「うう…一太に、怒られてしもうた」

ポツンと尻餅付いたままエリが、目をウルウルさせてつぶやく。ドミノが背中を向けて、ケツと言いながらしっぱでエリの涙を拭いた。

「加減を知らんからこんな事になるとたい」

サキューラは頬を押さえて座り込んだまま、呆然と宙を視線が泳いでいる。

ん？とドミノが覗き込むと、その目はうっとりハートになっていた。

「はあ：あの子、す、て、きん」

「いかん、病気が出とるたい」

ドミノが呆れて白黒の魔女に、大きく溜息をつく。

やがて大きな地割れに人が集まり、消防車やパトカーまで押し寄せてきた。

「まずかばい！エリッ、サキューラ逃げるよ！」

ドミノはしっぽを二股に分けると、2人の魔女の身体に巻き付けてあたふたと走り出す。

「キャアアッ、化けネコおっ」「ひーっ」

しかし今度はその二股しっぽのネコに人々の視線は集まり、更に騒ぎはパワーアップしていった。

5、激闘、朝のひとつき

そして、数日後の朝。

一太は今朝、寝不足から寝坊して、5時半を過ぎて起きてしまった。洗濯を干すのを後回しに、急いでパパのお弁当とママたちの昼食を作り、朝食の準備にかかる。

ジャツジャツジャツと、きんぴらゴボウを作り、フライパンで目玉焼き。

しかしフライパンが小さいので、4個までしか焼けない。

「ああ、どうしよう、もう一回焼かなきゃ」

焦りながら、リングを一個切る。

朝のリングはママの希望で、しかも皮むきはウサギのようにしなければならぬ。

可愛いのがママは好きなのだ。

「一太ちゃん、ママの帯締めがないのよ、どこだったかしら？」

「ああ、はいはい」

のんびりママの声に、一太は走ってママの部屋に行くとお気に入り帯締めを探して渡す。

「パパのネクタイね、今日はどれがいいと思う？」

「目えつぶって握った物でいいさ。パパは何でも似合うよ」

「あら、そうよねえ」

そんな物、考える暇はない。

「一太あ、ブス女が私の気に入りのタオルを取るのじゃ。このフリルが可愛いのに」

洗面所からは、エリの叫び声が響く。

「ほーっほっほ！こんな可愛いのは年増ブスには似合わないわよん」
「おのれー、後から来たくせに遠慮を知らぬ女じゃ！」

やっぱり喧嘩になった。遠慮はどっちも知らない奴らだ。
放っておこうかとも思ったが、家を壊されてもかなわない。
溜息混じりに今度は洗面所へ向かった。

「確かフリルの付いたタオルはもう一枚あるから、喧嘩しないでよ」
「ピンクがいいのじゃ、黄色は嫌じゃ」
「ああ、確か青かったけど、我慢してくれよ」
「むう、致し方ない。あつ、私が先に顔を洗うのじゃ」

バタバタと探し出したタオルを渡すと、エリ達は今度は洗面で順番を争っている。

付き合ってられないと台所に戻りフライパンのフタを開けると、目玉焼きの黄身はすでに固くなってしまった。

「あつつ、しまった、煮え過ぎちゃった。くそー、失敗作はエリにやろうか」

皿を持って居間に行くと、すでにママがテレビの前で正座している。
急いで皿を並べ、茶碗を用意して朝食の準備はゴールが近い。

「ママ、すぐに支度するからね」

「一太ちゃん、ママお茶をいれようかしら？」

お茶を入れるときは、70度まで冷ますのよね。えーと温度計は…」

「いや、僕がやるよ」

急須をママの手から奪い取る。

ママに任せると、お茶は8時過ぎるかもしれない。

お茶を注ぎ、ご飯を注いでようやく朝食の準備も終わった。

「ああ、やっと終わった。ごはんできたよ」

終わったとたん、どやどやと家族と居候が席に着き、さっさと食事を始める。

「ああ、お腹空いたわん。あら、今日もご飯？サキューラはパンが
いいのにん」

「私は卵焼きが好きじゃ」

「うるさいね、文句言うなら自分で作れよ」

フウツと、やっと一息入れてお茶を一口。

やがて遅れてきたドミノが、一太の膝にすりすりして横に座った。

「一太、洗濯物は干してきたけん。おいらも役に立つとばい。だから今夜もカレーにしてね」

「え？どうやって干したの？」

「しっぱで」

ガタンと、一太がお茶を飲む手を止めて飛び出した。

庭に干してある洗濯物は、グシャグシャのまま、しかも引きずったように泥汚れが付いてネコの毛にまみれている。

「ひいひいひい!!」

ババババツと取り入れ、もう一回洗濯機でゴンゴン回す。

「駄目だ、また今日も遅刻する」

ガックリと洗濯機にすがりつく一太に、楽しそうなエリとサキユーラとママの声。

女があれだけいるのに、誰一人ためになる奴はいない。しかも、どんどん居候が増えて一太は家事に追われる。

「くそう、絶対松蔵学園の寮に入るんだ」

硬く心に誓ったとき、玄関から声が聞こえた。

「いーちーたー、ガッコ行こうー」

「え? もうそんな時間?」

理子の明るい声に、ユラユラと廊下を玄関に向かう。

明るくさっぱりした顔の理子は、きつとゆつくりと朝を過ごすに違いない。

「おはよ! 今日はテストだから早く行っておさらいしよ!」

ハッと思い出して、ぐらりと壁に倒れかかる。

「テ、テスト? だったっけ?」

「そう、実力テスト。これで進路を決めるって、先生言ったじゃん」

一太が、ボタンとひっくり返った。

「あっ、一太、大丈夫?」

大丈夫なもんか。

俺は…俺は…

「あらん、一太ったらどうしたの？サキュラの膝枕ですぐに気分が良くなるわよん」

「ふん、ブス魔女の膝などに、頭を乗せたら腐るわ！」

「もう、やめんね、2人とも」

どこへ行っても喧々囂々、並べば喧嘩する。

そんな2人に、理子が啞然としていた。

「な、何であんた達がここにいるわけ？」

「うふん、実はねん」

「実は…」

「「帰り方がわからないのじゃ」のよん」
エッヘンと、偉そうに胸を張る魔女2人。

「だからね、可哀想じゃない？」

クネクネと駄々をこねるママ。

「はあ、そうなのですか」

理子が呆然と頷き、身体を起こしてガックリと肩を落とす一太の顔を覗き込む。

「大変なのねえ」

「俺の人生って…」

しおらしく頷く一太の目には、キラリと一つ、大粒の涙が光っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5286t/>

魔女は不幸の始まり

2011年6月14日12時18分発行